
サモンナイト

非国民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サモンナイト

【Nコード】

N1120B

【作者名】

非国民

【あらすじ】

サモンキング
召喚術によって、間違えて喚ばれてしまった直子。異世界の運命を背負わされてしまった彼女の運命は？

プロローグ（前書き）

サモンナイトというゲームを小説にしたものです。

プロローグ

キンコンカーンコン……

学校の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。

「直子！っ、待ってよ！」

直子の後を親友の幸子^{さちこ}が追っ掛けてきた。

「はあはあ。もう、私を置いて帰らないでよね」

「はは。ごめんごめん」

幸子がプウとむくれるのを見て、直子が笑う。

直子と呼ばれた女の子は髪をボーイッシュにカットし、私は元気です！と、周囲に言っているようなそんな感じの女の子だ。

「はあ……」

と、いきなり幸子がため息を吐く。

「どうしたの？ 何か悩みでもあるの？」

「ううーん、なんでもないの」

なんでもないという割りには、何か悩みがありそうな感じに見える。

「誰にも言わないからさあ、悩みがあるなら相談に乗るよ？」

「……………」

少しの間、沈黙が訪れる。

幸子は言おうか言わまいか考えているみたいだ。

「誰にも……言わない？」

「言わない、言わない」

「ねえ、直子のクラスにバスケ部のキャプテンの人がいるでしょ？」

「ああ、ハヤト君ね。確か、彼って競争率高いらしいよ？」

「そうなんだよね、彼に告白しようと思ってるんだけど、勇気がでなくてね」

ははは、と幸子は苦笑いを浮かべる。

「ねえ、あの人が誰かと付き合ってるて話は聞かないよね!？」

「うーん、私、彼と特に親しい訳じゃないからなあ。ほら、性格とか正反对みたいなものでしょ？」

「そう……ね」

「でも、噂になってないってことはチャンスはあると思うよ！折角勇気を出したんだから、ダメもとで告白してみたら？」

「以外とOKかもよ？」

「以外ってどういうことよ。でも……、うん、勇気を出してみようかな」

「そうそう、当たって砕けろよ」

「えっ？砕けなきゃ……だめ？」

二人は笑いながら、自宅への帰路についた。

幸子と別れた直子は、まっすぐに家へと帰らなかった。小高い丘の上にある公園、そのブランコに座り、考え事を始める。

（本当にこのままでいいのかしら？このまま就職をして、結婚すればそれなりに幸せになれる。けど……、それ以上の幸せは絶対に手に入らない……）

そんなことを考えていると、突然声が聞こえてきた。

『助けて……。誰か……。助けて……。』

「えっ？ 誰！？ 誰か、そこにいるの？」

声のした方を向く。が、そこには誰もいない。

「気の……せい……？」

周囲を見回す。

が、人っ子一人いない。

「気のせいね」

ホッと息を吐く。

『このままだと、壊れてしまう……。何もかも……。壊れて、消えてしま……。』

「っー！！」

気のせいではない。

確かに声が聞こえてきた。

「誰？どこにいるの？」

辺りを見回せど、やはり人気はない。

『運命を止めて……この世界を助けて……』

謎の声が助けを求めてくる。

その声が終わると同時に、突如目の前の空間に黒い塊が出現した。

「えっ？これ……、何？」

と、その黒い塊は急激に直子を吸い込み始めた。

「ま、まさか……ブラックホール……？」

必死の抵抗虚しく、直子は黒い塊に吸い込まれてしまった。

—— 異世界 ——

「きゃ、キャーーーーッ」

黒い塊から吐き出され、直子は尻餅をつく。

「いたたた。まだ結婚もしてないのに」

腰を擦る。うん、痛くない。嫁入り前だからね。気を付けなきゃ。

そんなことを考えながら、周囲を見回す。

そこには、今までいたはずの公園はなく、広い荒野が広がっていた。

「えっ！？ここは……どこなの！？何かの穴の底みたいだけど……」

なんでこんなところに？」

ほつぺたをつねってみる。

「痛い、夢じゃ……ない!？」

（ここにもいても仕方がないわ。まずは穴の上まで登ってみましょう）
穴の上へと登る途中、赤や緑の綺麗な石が落ちていた。

「綺麗な石ね」

やはり女の子である。綺麗な石があると、どうしても拾ってしまうようだ。

穴の上に辿りつくのと、そこでは何人かの人間が横たわっていた。

「もしもし、そんな所で寝ていたら風邪を引きますよー」

肩を擦ってみる。

と、何か生暖かい液体が手に付いた。

「ひっ！」

その液体は赤く、地面にも大分染み込んでいた。

「みんな……、死んでる！？ ひどい、どうしてこんなことに……
もしかして、私の所為なの？ 私が、こんな日常は嫌だって考えたから？」

イヤ…… イヤアアア！！」

顔を塞ぎ、直子はその場から走って逃げだした。

「はぁ、はぁ……」

どのくらい走ったのだろうか、気が付くと見たことのない造りの建物が辺りに点々と建っている。

（必死に走ってきたのはいいけど、どうやってここまで来たのかわからないし……。少し落ち着いて考えをまとめないと……）

目を瞑り、順に記憶を辿っていく。

（確か、学校の帰りに公園によって考え事をしていて……。それで、声が聞こえてきて……。それから……。そう、黒い塊に吸い込まれたんだ。）

次第に記憶が蘇ってくる。

気を落ち着かせたところで、もう一度周囲を見回してみる。

そこは、薄暗く、ゴミが散らばっている、いわをるスラブといわれ

る様なところだ。

「そこにいるのは誰!？」

何かの気配を感じ、直子は路地裏に向かって叫ぶ。

「GURURURURU」と、突然背後から獣が鳴く様な声が聞こえた。

ビクッ

「えっ!？ そっち!？」

直子は、慌てて後ろを振り返る。そこには、全長50cmくらいのゼリーの様な生物スライムがいた。

「GURURU」

スライムが直子に向け、飛び掛ってくる。

「きゃーっ!」

両手で顔を守る。

「GUGYAAAA」

何故か、襲ってきたはずのスライムが悲鳴をあげた。

「!？」

ゆっくりと目を開ける。

「おおっ。怪我はなかったか？お嬢ちゃん」

そこには、黒髪のチンピラのような少年がいた。

出会い

「おおっ。怪我はなかったか？嬢ちゃん」

チンピラ風の少年が、こちらに近付いてくる。

「あ、ありがとう……」

直子が少年にお礼を言い終わらないうちに、少年がスッと手を出してきた。

「へっ？」

直子はキョトンとした表情を浮かべる。

「へっ？　じゃねえよ。金を出しな。有り金全部。助けてやったんだから」

「ちよっ！？　何を言ってるんですか！　善意で助けてくれたんじゃないんですか？」

「何を言ってるんだ？　誰がわざわざ危険を犯してまで他人のあんたを助けてやらねえといけないんだ」

確かにこの少年が来なかった私の命がなかったかもしれない。私は、渋々この少年にお金を渡すことにした。

「確かに助けて貰ったしね。わかったわ」

そういうと、直子はポケットから財布を取り出した。

「おっ」　話分かるじゃねえか　って……なんだこりゃ？　おい、オレは紙屑や鉄屑をくれなんて言ってるぞ！！」

「そんなこと言ったって、この世界のお金なんて持ってないし……」

「なにを訳のわからんことを言ってるんだ？　助けて貰っておいで、オレの事を馬鹿にしてるのか？」

少年がナイフをちらつかせながらにじり寄ってくる。

「ち、違います！！　そんなつもりじゃ……」

「じゃあ、どういっつもりなんだよ！！」

少年の顔付きがどんどん険しくなってくる。

「ひっ！　それ以上近付かないで！！」

直子はポケットに入れていたペーパーナイフを取り出した。

「！？　へえ、やろうつてのかい？」

「ペ、ペーパーナイフだって、切られると痛いし血が出ますよっ！私、本気ですからっ！！」

ナイフを持つ手が震えている。

「ほう！？」

少年がポケットに手を忍び込ませ、もう一本ナイフを取り出した。

（この人……本気だ）

涙とともに、親友の幸子との思い出が走馬灯のように浮かんでくる。

「ひっ！イヤ、イヤアアアッ！！」

直子が悲鳴をあげた瞬間、突如、空間が揺らめき前方に大小様々な石の塊が出現した。

「なっ！！」

その塊が少年を襲うように飛来する。

「くそっ！！」

少年は、突然襲ってきた石の塊を建物の壁に隠れてやりすごす。

「！？　い、今は……」

（私がやったの？）

「てめえ……よくもやってくれたなあ！絶対に許さねえ！！」

「きやつ！」

少年がナイフを構え、直子に斬りかかる。

「そこまでだ、ガゼル」

すんでの所で、鎧を着た青年が少年の腕を掴んだ。ガゼル

「レ、レイド……何でだよ！？　こいつの所為でオレは死ぬところだったんだぞ！！」

「だが、彼女に手をだそうとしたのはお前が先だ。身を守ろうとした彼女は悪くない」

「ぐっ……ずっと見てたのかよ」

「まあ……な」

レイドと呼ばれた青年がこちらに近付いてくる。

「ところで……見かけない顔だが、君はどこから来たんだ？」

「……じつは……わからないんです。」

「はあ？ 何言ってるんだ？ おめえ」

一緒に話を聞いていたガゼルが『この若さでボケてしまったのか。可愛そうに……』と、いったそんな顔をしている。

「少なくとも、こことは違う世界だとは思ってますけど……」

こんな話、信じてくれないだろうな。そう、思いながらも、直子なぜここに来たのか、知っている限り全てをレイド達に説明した。最終まで黙って直子の話を聞いていたレイドが口を開く。

「……なるほどな。ついてきなさい。君の知りたい事は少しくらいなら説明してあげられると思う。」

直子は、不安ながらもレイド達の後をついていくことにした。

どこから来たの？

〔孤児院跡〕

「ここが、私達がねぐらに借りている場所だ。元は孤児院だったんだがな……。潰れて放ったらかしになっていたのを、まあ……。無断で借りているわけだ。」

レイドに案内され、直子は孤児院の玄関をくぐる。

「な……。無断っていけないんじゃない？……。」

「仕方ないだろ。この主は捕まっちゃまったんだから。」

さらっと、ガゼルがとんでもない事をいう。

「えっ？ それって……。。」

「ケツ！ お前にや関係ねえよ！」

この事には触れない方がいいのだろう。ガゼルの機嫌が悪くなるのが分かる。

「まあ、とにかく座ってくれ。」

レイドは居間へと直子を通した後、椅子へ座る様に勧める。

「は、はい。ありがとうございます。」

直子はペコリとお辞儀し、椅子へ腰を下ろした。

「返せよ！ それ、オイランドぞ……！」

歳の頃は10歳くらいだろうか？ 茶色の髪をした男の子が、同じくらいの歳の女の子を追い掛けている。

「べーだ！ 早いもん勝ちよお！」

追い掛けられている緑の髪の女の子が、可愛らしくあっかんべえをし、チヨロチヨロと男の子から逃げ回っている。手には、美味しそうな焼き芋が握られている。

「ま、待ってよ。」

その男の子と女の子を追うように、金色の髪の女の子がトコトコ

と走ってきた。

「こんな小さな子達が、こんなところに。どうして……？」
直子が小さく呟く。

「おい、チビどもっ！ あっちへ行ってる！！」

ガゼルの周りをチョロチョロと走り回っていた子供達が、ガゼルの怒鳴り声でピタッとその動きを止める。

「……うつつ。うわああああん！！」

自分が怒られたと思ったのだろう。皆の後を着いて回っていた金色の髪の女の子が何始めた。

「わわっ。こ、こら。泣くな。泣くんじゃねえっ！」

言葉は悪いが、声の調子からはガゼルがかなり動揺しているのが分かる。

「うわああああん！！！！」

だが、女の子にその事が分かるはずはなく、より、大きな声で泣き始めた。

「どうしたの？ ラミ？」

女の子の泣き声を聞き付けてか、歳の頃が二十歳くらいの女性が、エプロンで手を拭きながら歩いてくる。

「ひつく、ひつく……。」

彼女は、泣きじゃくる女の子を泣きやませると、キッとガゼルを睨みつける。

「ガゼルっ！ また、あんたが泣かせたんでしょ！？」

「な、なんでそうなるんだよ……。オレはただ、こいつらがうるさかったから……。」

ガゼルは彼女が苦手なのか、イタズラが見付かった少年の様に、オロオロと自分が間違えてないと、主張している。

「ふう〜ん。ガゼルは生意気にも口ごたえなんかしちゃうんだ？」

ふう〜ん。それはつまり、今晚の晩御飯はいらないうってことね？」

ニコリと微笑み、彼女はガゼルへと詰め寄る。口元は笑っているが、目が笑っていない所を見ると、本気なのだろう。

「ちょ……、ちょっと待てっ！」

その女性が怒っているのが分かってるのか、ガゼルが慌てて弁明しようとする。

「ごめんなさいは？」

その女性が作り笑いを浮かべると、ガゼルに謝る様に促す。

「……ちくしょう！」

納得いかないのだろう。僅かに涙ぐんでいる。

「ご・め・ん・な・さ・い。は？」

彼女は一語一語区切り、何事も言わせないプレッシャーを放つ。

「……ごめんなさい。」

そのプレッシャーに押されてか、ガゼルが素直に謝った。

「よーしい」

女性はニコリと笑みを浮かべる。

「コホン。ああ、リプレ。取り込み中の所申し訳ないが、ここにお客さんがいることにそろそろ気付いて欲しいんだが……。」

レイドは、話が一段落付いたのを見計らい、直子を紹介する。

「ど、どうも……。」

「へっ？ ……って、きゃあ！ ごめんなさいっ！！ みつともない所をお見せしちゃって。すぐにお茶を入れて来ますから！」

リプレと呼ばれた女性は顔を赤らめると、ラミを抱き立ち上がる。

「ほら、あんたも手伝うのよっ！」

「な、なんで俺が？」

「いいから、来るの……！」

リプレはガゼルの腕を取り、奥の台所へと引っ張っていった。

「気を悪くしないでくれないか。何しろ、お客が来るなんて事は、滅多に無いんでね。さて。君はまず、ここが何処だか知りたいんだろっ？」

今までの雰囲気打ち壊したいのか、レイドが神妙な顔で話始める。

「あ、はい。」

「『リインバウム』この世界はそういう名前で呼ばれている。そして、ここはリインバウムの中央北に位置する、『サイジエント』という街だ。聞き覚えはあるかい？」

直子に訪ねる。

「……いいえ。」

小さく首を振る。

「そう……。だろうな。」

予想が当たっていた。と、いうようにレイドが考え始める。

「えっと……。どういう事なんですか？」

「あ、ああ。すまない。きちんと説明しよう。君は多分、別の世界から『召喚術』で呼び寄せられたんだ。」

「召喚術……ですか？」

「君の居た世界ではどうなのか分からないが、リインバウムではそういう魔法があるんだ。召喚師と呼ばれている人間だけが、それを使うことが出来るんだ。君がこの世界に来た時、近くに怪しい格好をした人はいなかったのか？」

「実は……。皆、死んじゃってたんです。血を出して……。」

「そうか……。そこにいた者達が、きつと君を呼ばうとした召喚師だろうな。恐らく、儀式の途中で何かが起きてしまい、そんなことになってしまったんだろうな。」

「あの人達が死んでしまったのは……。私が原因なんでしょうか……？」

ずっと、気になっていたことを直子は打ち明ける。

「いや、それは考え過ぎだろう。君が目を覚ました時は、その人達はもう死んでいたんだろう？」

「でも……。」

「レイドの言う通りだ。俺もそう思っぜ。だからさ。あまり気にすんな。」

私達の話は奥まで聞こえていたのだろう。リブレとガゼルがお茶

を持つてくる。

「そうですよ。今夜はここに泊まって、これからどうするかを考えてください。」

リブレがニコリと微笑み、直子に泊まる様勧める。

「……はい。」

「じゃあ、ガゼル。彼女を空いてる部屋に案内して。」

「ああ、分かったよ。付いてきな。」

ガゼルはサツとキビスを返すと、空き部屋への案内を始めた。

初めての朝

「ほら、ここが空いてるから。」

ガゼルが案内してくれた部屋は、使われていないにも関わらず、綺麗に掃除されていた。

「布団は後で持ってきてやるからな。」

ガゼルの口調は淡々としているが、直子の事を気遣っているのがわかる。

「あの……。」

「ん？ なんだ？ トイレなら、右に突き当たった所にあるぜ。」

「ち、違うの……。あの……。ありがと。」

「ば……。馬鹿か。俺はリプレの奴に頼まれてだな。仕方なく……。」

地球で流行ったツンデレかと思われるセリフを言い、ガゼルは部屋を後にした。

↓直子の部屋↓

「ああ。今日は色々あったなあ。」

直子はバフツと布団の上に寝転がると、これからの事を考える事にした。

（私は召喚術って魔法でこの世界に呼び出されたみたい。こういうのは、漫画やアニメの世界の話だと思っていただけ……。まさか、自分がそれに巻き込まれるなんて……。だけど、これは現実なんだ。私は、帰る方法を見付けるまで、この世界で生きて行かないやダメなんだ。）

気が付くと眠っていた状態で、直子はリンバウムでの最初の朝を

迎えた……。

ちゅんちゅん。

「ん……、朝か……。」「窓から射し込む優しい太陽の光と鳥のさえずりを聞き、目を覚ました直子はベッドの上で軽く伸びをする。そして、周囲を見回すと、小さく肩を落とした。

「やっぱり、昨日の事は夢ではなかったんだ……。」「見慣れない部屋、見慣れない景色。何もかも新鮮で、それでいて不安。

「お母さん……。心配してるだろうなあ……。」「直子の脳裏に、昨日の朝出迎えてくれた母の顔が、鮮明に蘇る。」「もしかしたら、北。鮮に拉致されたって思ってるかな。」「

直子はクスリと笑い、昨日足元に脱ぎ散らかした制服を着ることにした。

（居間）

「リプレさん。おはようございます。」「

「あ、おはよう。」「

「朝御飯、もう少ししたら出来るからね。」「

トントンと、小気味良い音が聞こえてくる。

「ああ、腹減ったあ……。」「リプレ、飯はまだか？」「

大きく欠伸しながら、ガゼルが居間へと歩いてきた。隣には、見知らぬ大男がいる。

「おっ！ 早ええじゃねえか。」「

よっ！ と、手を上げるガゼルに、その大男が耳打ちをする。

「この子は？」

「ああ、エドスは昨日居なかったから知らないか。こいつは、違う世界から来た直子っていうんだってさ。」

エドスと呼ばれた大男が、小さく礼をする。それに習い、直子も小さく礼をする。それを待っていた様に、リプレが朝食を運んでくる。

「さあ、冷めないうちに食べて。」

「あ、ありがとうございます。」

直子達は、各々、リプレの料理を食べ始めた。

「朝御飯、どうだった？ 大した物が作れなくて、ごめんね。」

直子が朝食を食べ終えた頃、リプレが照れ臭そうに呟く。

「あ、いえ。美味しかったですよ。とつても。」

「そりゃあ、ただで食うメシだもんなあ。味の文句なんか、言える分けねえぜ。」

「うつ……。」

本当に美味しかったのだが、世話になっている以上我慢するしかない。

「ガゼルっ！ あんたは何か文句があるんだ。ふうん。」

「いや、そういう訳じゃ……。」

リプレの言葉に、ガゼルが大人しくなる。

「薪割りでもしてくれるんだよね？」

一瞬、なんで俺が！？ と、いう顔になったが、リプレには敵わないと悟ったのか、大人しく従う。

「ケツ！ へいへい。そうさせて貰いますよ。」

そういうと、ガゼルは大きな足音をたて、裏口から出ていった。

「ごめんなさいね。後で叱っておくわ。」

リプレが、すまなそうに謝ってくる。

「あ、うつん。気にしてないから。ホント。」

「そう？ それなら、いいんだけど……。アイツ……。多分すねてるのね。まったく……。いつまでたっても子供なんだから……。」
呆れたという様に、リプレが愚痴を溢す。

「あ、あのさ。何か手伝うこと……。ない？」

ガゼルの言葉を気にしている訳ではないが、世話になっている以上、何か手伝いたいと思ったのだ。

「えっ？ あ、いいのいいの！ あなたはお客さんなんだから。それに、これからの事を考える時間も必要でしょ？」

「うん……。そっか。そうだよね……。」

そうだった。異世界にいる以上、これからの事も考えなきゃならないんだ。そう思うと、直子はリプレの言葉に甘えることにした。

「何か分からない事があったら、遠慮しないで聞けばいいよ。私は台所で洗い物とかをやってるし、レイドやエドスもまだ出かけていないはずだから。」

ね？ と、リプレが微笑む。

「あ、でも……。ガゼルの奴には近付かない方がいいかもね。」

「そう？」

「そうよ。多分、あいつ今機嫌悪いだろうから。」

直子と顔を合わせ、クスクスと笑うと、リプレは思い出した様に付け加えた。

「それから、絶対に一人で外に出たらダメよ。迷子になったら大変だからね。」

「あ、はい。分かりました。」

直子ありがとうございます。と告げ、居間を後にした。

フラット

（廊下）

「さて、何をしようかな……。外に出たら危ないって言ってたし……。」

腕を組み、考えを巡らせる。

「あ、レイドさんにもう少し詳しい話を聞こう！」

そう小さく呟くと、直子はレイドの部屋へと向かうことにした。

（レイドの部屋）

コンコン

部屋の扉を数回ノックしてみる。と、部屋からその部屋の主と思しき人が顔を出した。

「やあ。来たね。待ってたよ。さ、入って。」

これから外出するのだろう、外出用の服にヒゲ剃り用クリームを顔一面に塗りたくったその男は、直子を部屋へと招きいれる。

「あ……。あの……。レイド……。さん？」

「ん？ ……………。あ、すまない。その椅子で少し待っていてくれないか。」

そう言うつと、レイドは洗面所へと向かった。

「またせたね。」

顔のクリームを落としたレイドが姿を表した。

「いえ。」

レイドは椅子に腰掛けるとじっとこちらを見つめる。

「少しは落ち着くことは出来たかな？」

「あ、はい。おかげさまで。」

「それはよかった。ところで、これから先の事はもう決めたのか？」

「はい。元の世界へ帰る方法を探そうと思ってます。」

私を笑顔で送り出した母の顔を思い出し、こぼれる涙をグッと堪えた。

「まあ、そうだろうな……。」

「何か方法がありますか？」

「召喚術の事は、召喚師に聞くしかないだろうな。もっとも、そう簡単にはいかないだろうがね。」

「えっ？ 何故です？」

「召喚師のほとんどは、自己中心的な連中だね。彼らに頼むなら、何かしらの代償が必要になる。お金なら、とてつもない金額さ。」

「ああ……。やっぱり……。」

予想していた事ではあったが、帰る為には仕方ない。

「それに、仮にお金が集まってもこの街の召喚師はあてにしない方がいい。」

「えっ？ どうしてです？」

「詳しい事は、いずれ説明するよ。これから用事もあるしね。すまない。」

気になる言葉を残し、レイドは部屋を出た。

「あっ……。」

どうしよう……。

帰れないかもしれない。そんな不安が脳裏をよぎる。直子はほつぺたをぱちぱちと叩くと、大きく息を吸った。

「うっん。まだ帰れないと決まった訳じゃない！ 他の人にも話を聞いてみなきゃ。」

自分に言い聞かせるように呟くと、レイドの部屋を後にした。

「廊下」

レイドの部屋から出た途端、横からの衝撃を受け、倒れ込む。

「いたた……。」

「あ、ごめんなさい。」

何事かと声のした方を振り向く。どうやら、昨日の子供達が遊んでたようだ。

「ん〜ん。ごめんね。少しボーツとしてたから。」

「そだ！ お姉ちゃん一緒に遊ばない？」

昨日の緑の髪の子が声をかけてきた。

「ん。いいよ？」

「ずるい！ 俺とも遊ぼうぜ！ 海賊ゴッコやりたいんだ！」

「ダメよ。お姉ちゃんは、私とおままごとするんだから。」

「あの……。お話……。して。」

クイクイツと袖を引っ張り、金髪の女の子が話しかけてくる。

「全部一緒には無理だから、どれか一つね。」

「なら、おままごとね。」

「なんでだよ。海賊が格好いいだろ！ ままごとなんて出来ないね。」

「でも、ままごとは将来の役にたつもん。」

「なんだよ……！」

「なによ……！」

「二人とも……。ケンカしたらダメエ……。」

これから取っ組み合いを始めそうな二人のそでを引っ張り、金髪の女の子が制止する。

「ちよつ……。喧嘩したら遊べないよ？」

直子も慌てて止めに入る。

「とりあえず、部屋に戻るから何して遊ぶか決まったら声かけてね？ いい？」

『はあい……。』

三人は大人しくなり、誰の案で遊ぶか話始めた。

〈台所〉

直子にあてがわれた部屋に行くには、リビングを通る必要がある。リビングに入ると、片付け中のリプレと会った。

「あ、リプレさん。すみません。いきなりお邪魔しちゃて……。迷惑だったでしょ？」

「ん？ あ、いいのよ。ここにお客さんが来るのなんて初めてだし、私もやり甲斐あるしね。」

洗い物をしながら、リプレが答える。

「それよりもごめんね。やる事が多いから、家事しながらで。」

「あ、大丈夫ですよ。そういえば、リプレさんはどうしてここにいるんです？」

素朴な疑問を投げかける。

「あ、そういえばまだ言っていなかったわね。私もガゼルも、この孤児院に捨てられてたの。」

突然の告白に息を呑む。

「すみません。嫌な事聞いて……。」

「ん〜ん。いいよ。この皆は、大体そうだから。あの子達もね……。だから、ここではお母さん役の私が頑張らなきゃ。」

腕まくりをし、ガッツポーズを作る。

「何か手伝いましょうか？」

リプレの隣に行き、腕まくりをする。

「お客さんにそんなことさせれないわ。」

リプレは慌て直子が手伝うのを止めた。

「いえ、手伝いますよ。私のいた世界では、お世話になった人に一宿一飯の恩を返す風習があるんで。」

「そう？ なら、悪いけど子供達の相手してもらえる？ 多分、寂

しがってるから。」

その言葉で、ハッとする。

「あっ……。忘れてた。一緒に遊ぶ約束してたんだ。」

くすくすと笑うリプレに礼をして、直子は赤くなった顔を隠すように台所を後にした。

く直子の部屋く

直子が部屋に戻ると、子供達が待ってましたとばかりに飛び付いてきた。

「遅い！ 待ってたんだぞ！」

「ごめんごめん。で、何で遊ぶか決めた？」

「うん。お姉ちゃんはお達の事よく知らないから、お話することにしたの。まずは、自己紹介するね。」

そう言うのと、緑の髪の女の子が胸に手を当てる。

「私はフィズ。で、こっちの生意気なのがアルバね。」

そう言うのと、男の子の方を一瞥する。

「生意気じゃないや！ フィズだって男の子みたいじゃん。」

「なんですって!？」

「ケンカしちゃ……。ダメ……。」

今にもつかみ掛かりそうな二人の袖をもう一人の女の子が掴む。

「ごめんね。ラミ。」

フィズはアルバを睨むと、ラミと一緒に椅子に座った。

「私達はこんな感じかな。お姉ちゃんのいた所の話を聞かせて。」

よほど違う世界の話を聞きたいのだろう。三人共、目を輝かせている。

「ん……。私のいた所かあ。」

友達の話、家族の話、友達と遊園地や動物園に遊びに行った話を

する。得に、遊園地の話では子供達の興味が離れることはなかった。話に盛り上がっていると、コンコンと扉を叩く音が聞こえる。扉を開けると、リブレが立っていた。

「直子に皆、おやつが出来たよ。」

その言葉を聞くやいなや、子供達は飛び出していく。

「ねえ。今日のおやつは？」

「今日はカップケーキよ」

「やったあ」

子供の笑顔は元気が出るな。そう思いながら、直子も広間へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1120b/>

サモンナイト

2010年10月10日22時47分発行